

瀬戸内におけるマカロニ小麦(*Triticum durum*)の適応性に関する研究

安部秀雄・多田正敏・村井修・神前芳信・末沢一男

1962年から1964年にわたって、水田裏作にイタリーより導入したマカロニ小麦の瀬戸内地方の適応性を検討しさらに、生産された子実(原粒)の品質について調査した。

1. マカロニ小麦は農林26号に比し1週間から10日ほど出穂期がおそく、稈長も10~35cmと高く倒伏し易い傾向にある。

赤かび病は農林26号より弱いため農林26号の30~70%の収量にしか達しなかったが、比較的有望な品種はSAS449であった。

2. 播種期を1ヶ月早めることによって出穂期は8日~15日早まるが、収量は減少の傾向にある。この原因は赤かび病が早まきに多く発生することに起因するものと思われる。

3. SAS449について赤かび病抵抗性系統の選抜を行った結果、比較的強い系統を含むことが分った。これはイタリーで赤かび病の抵抗性の選抜が加えられていないためであろう。

4. 薬剤散布による赤かび病の防除で、被害を軽減することはできたが、完全防除には至らなかった。しかし農林26号の10アール当り458Kgの収量に比して84.9%の収量を上げ得ることが判明した。

5. 本邦産のマカロニ小麦は稔実不良による品質の低下が大きい。すなわち千粒重、立重が低下し皮も厚く灰分も多くなるので一次加工としての品位は著しく低下する。しかし整粒の場合は製粉歩留も高く湿麩量も多いことから強力粉としては十分価値がある。またこれらの品種の中ではSincapeが製粉歩留、湿麩量とも高かった。

以上の結果、マカロニ小麦は赤かび病対策と早熟で赤かび病抵抗性品種の育成ができれば、マカロニ用小麦として良質の子実が生産できることから、瀬戸内地方に導入の可能性があろう。